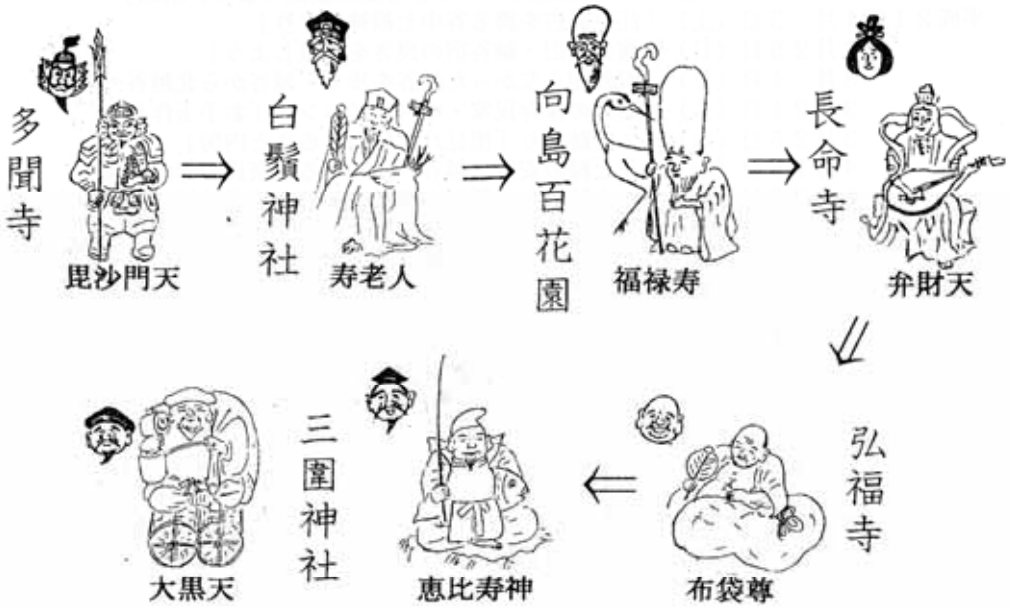
第 398 回　史跡めぐり

『隅田川七福神を詣でる』

――向島の歴史を垣間見ながら――



日　　時　平成２２年１月３日（日）
集合場所　越谷駅東口　９：００
９：１４　区間準急浅草行（堀切駅下車）
コース（５．５キロメートル）
越谷駅→堀切駅→荒川放水路→隅田川の鐘ヶ淵（越谷・増森の古利根川「せい魚伝説」）→墨堤通り→カネボウ発祥の地→多聞寺（毘沙門天）→古代の奥州道→古代の東海道→木母寺（梅若丸伝説）→白鬚神社（寿老人）→墨堤（隅田川堤）→向島百花園（福禄寿）→幸田露伴の住居跡→鳩の街→長命寺（弁財天）→弘福寺（布袋尊）→三囲神社（恵比寿・大国神）→浅草駅《12:30 分解散予定》

「隅田川七神めぐり」とその周辺の歴史

加藤幸一

１．足立２中

足立区立第二中学校（あだちくりつ・だいにちゅうがっこう「足立２中」）は、東京都足立区にあった中学校。テレビドラマ「3 年B組金八先生」のロケ地（東京都区立桜中学校の校舎）として全国的に有名な学校であったが、著しい少子化・ドーナツ化現象・中学受験の過熱化などの理由により学区内の生徒数が急激に減少し、全校生徒が 127 人と少なくなったため、2005 年 3 月末に廃校となった。現在は、東京未来大学（2007 年 4 月）に変った。
※フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「足立区立第二中学校」より抜粋

２．荒川の風景とロケ地

荒川の風景とロケ地：荒川の緩やかな土手風景は、たびたび映画やテレビドラマの舞台となり、荒川の代名詞的な風景といえます。特に、堀切橋周辺の荒川が一望できる土手は、昭和５４（１９７９）年から放映された武田鉄矢主演のテレビドラマ、「３年Ｂ組金八先生」のロケが行われた場所です。ドラマは、荒川近くの中学校が舞台となっており、荒川の土手や河川敷でのシーンがたびたび映し出され、特にドラマのオープニングで土手を歩くシーンは有名です。（堀切駅東口荒川放水路そばの掲示板より抜粋）

３．荒川放水路

隅田川（荒川）の氾濫を防ぐためにできた人工の川。

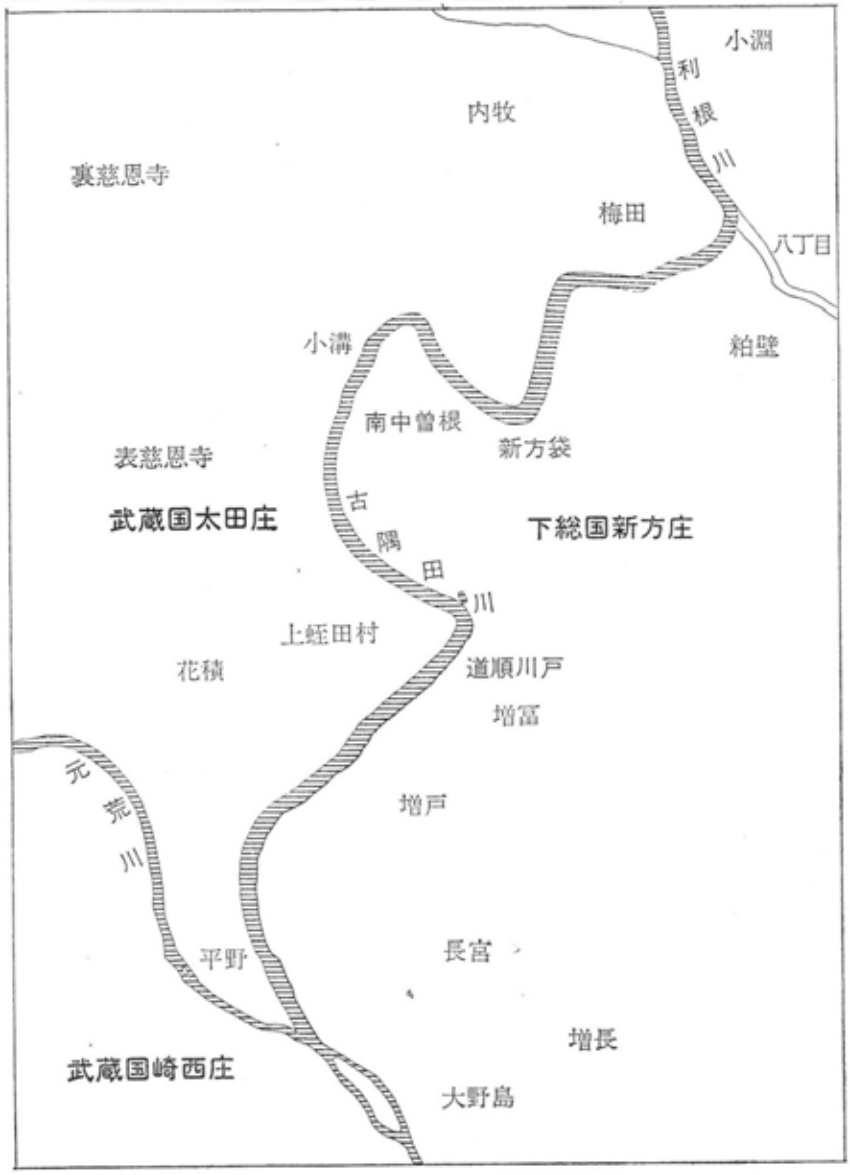
明治４３（１９１０）年８月、数日間に渡って降り続いた長雨は、途中から豪雨となり、荒川や利根川など関東から東北地方にかけて大被害をもたらした。隅田川（荒川）の堤防が決壊し、みるみるうちに東京の下町は泥の海へと化した。そこで、洪水被害を無くすために川幅５００メートル、延長２２キロメートルの荒川放水路の建設が計画された。

明治４４（１９１１）年　荒川放水路の測量と用地買収が始まる。
大正　２（１９１３）年　掘削が始まる。
大正１３（１９２４）年　岩淵水門が完成し、通水が荒川放水路全川に行われる。
昭和　５（１９３０）年　荒川放水路が竣工する。

４．古隅田川の流路跡

下図は、古代の隅田川の推定流路の一部としての春日部市内にある古隅田川（新方領の古隅田川）の流路図である。本間清利氏の「利根川」（埼玉新聞社）より抜粋した。

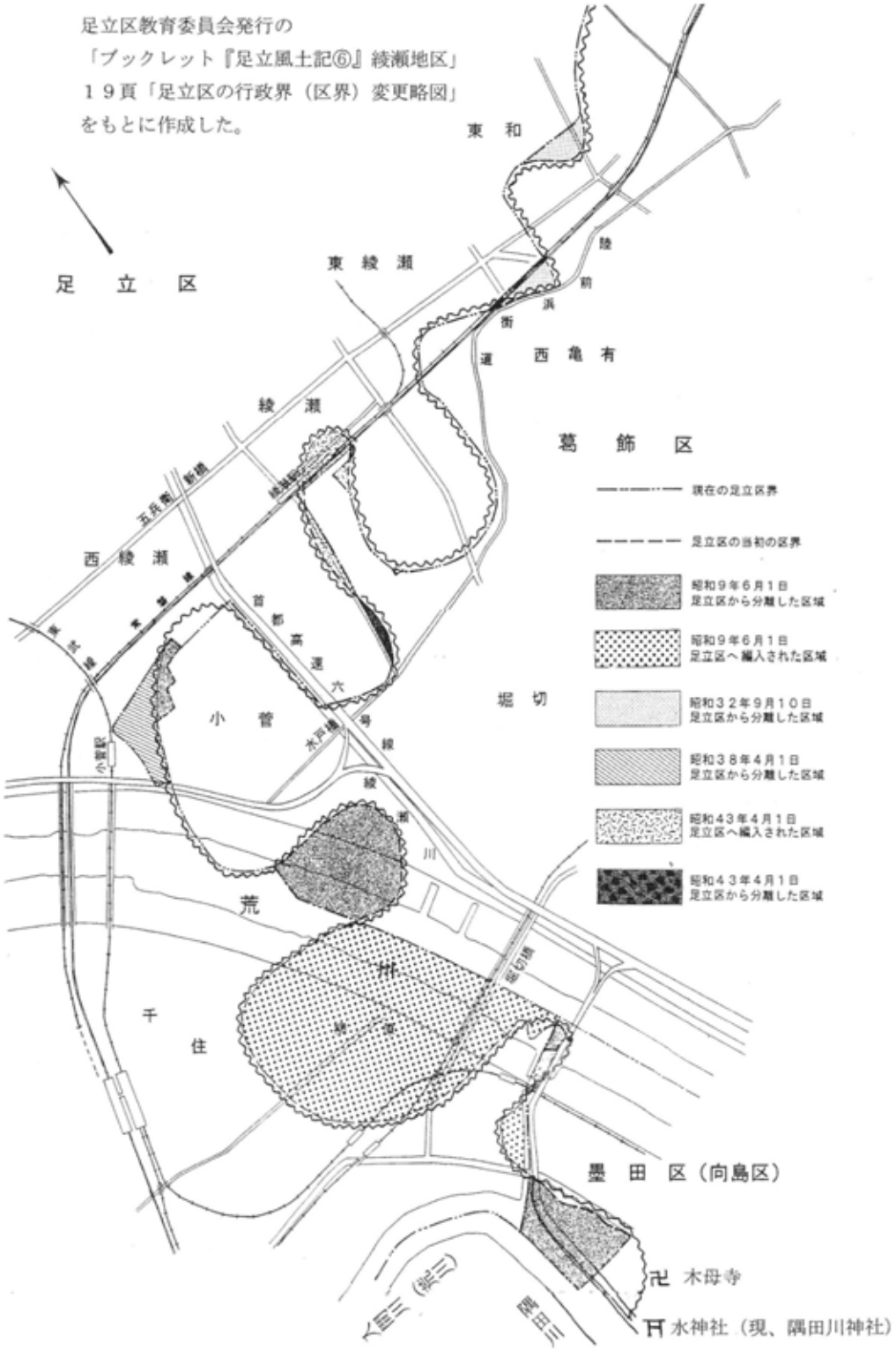
春日部市内の古隅田川（新方領古隅田川）



古代の利根川流路（新方庄古隅田川）

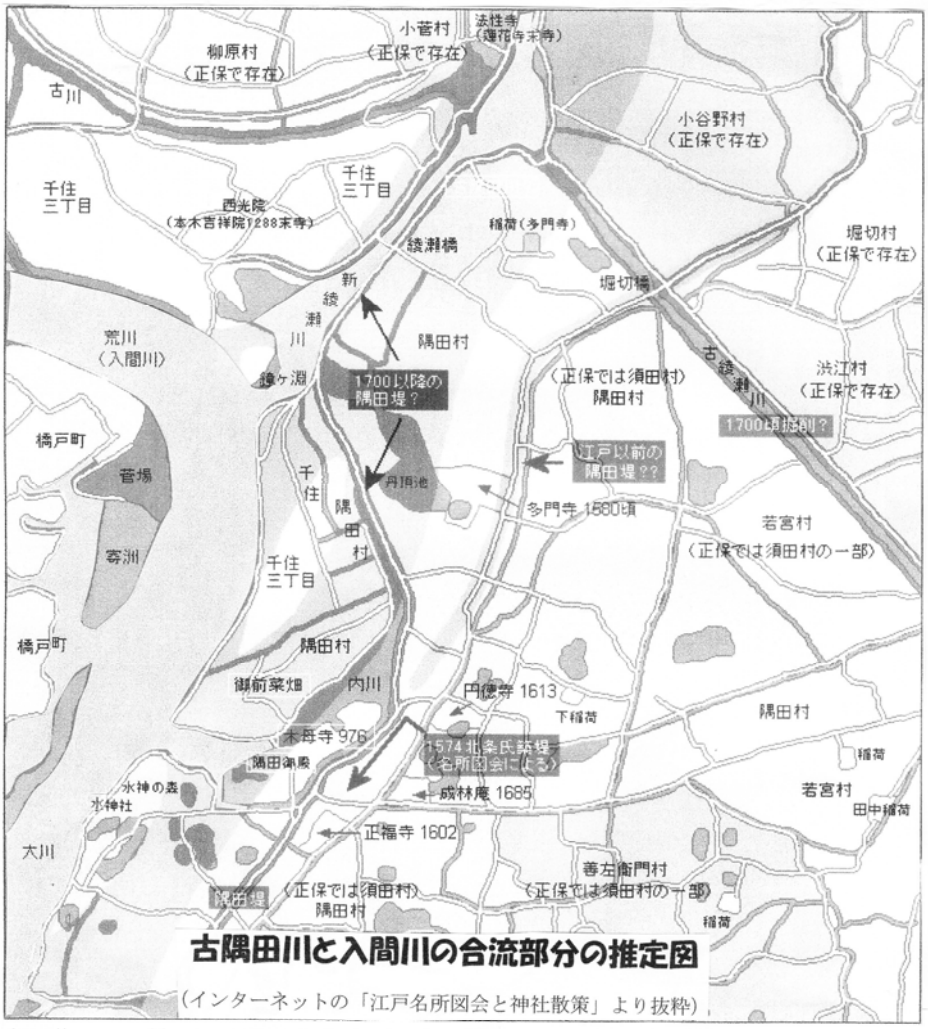
武蔵国埼玉郡太田庄に属していた地域は、古隅田川以北の豊春地区（花積、道口蛭田、上蛭田、下蛭田、道順川戸）と古隅田川以北の内牧地区であった。古隅田川以南の地域は、下総国葛飾郡下河辺庄の一部（後の新方庄）に属していた。

足立区内の古隅田川の推定流路（葛西領古隅田川）



古綾瀬川は、足立区と葛飾区の区界を流れ、足立区の柳原の西側に沿って流れ、木母寺と隅田川神社の北側で隅田川に流れ注いでいたと思われる。

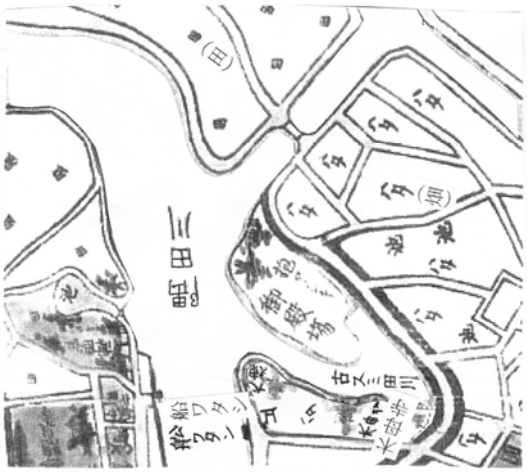
下記の地図中で、「新綾瀬川」はかつては当時の「古綾瀬川」（現在の荒川放水路と平行に流れている綾瀬川）に対してこう呼ばれたが、現在は荒川放水路と平行して流れている「綾瀬川」に対して「旧綾瀬川」と呼ばれている。新綾瀬川は、古隅田川の流路を利用して作られたものと思われる。



古隅田川と入間川の合流部分の推定図

（インターネットの「江戸名所図会と神社散策」より抜粋）

http://www.asahi-net.or.jp/~vm3s-kwkm/zue/sumidagawa/map3b.html　2009/12/17



木母寺・水神社北側の

古隅田川（内川）

須原屋江戸大絵図　綾瀬川流入口南に古スミ田川と書かれた大きな入り江が流入口跡

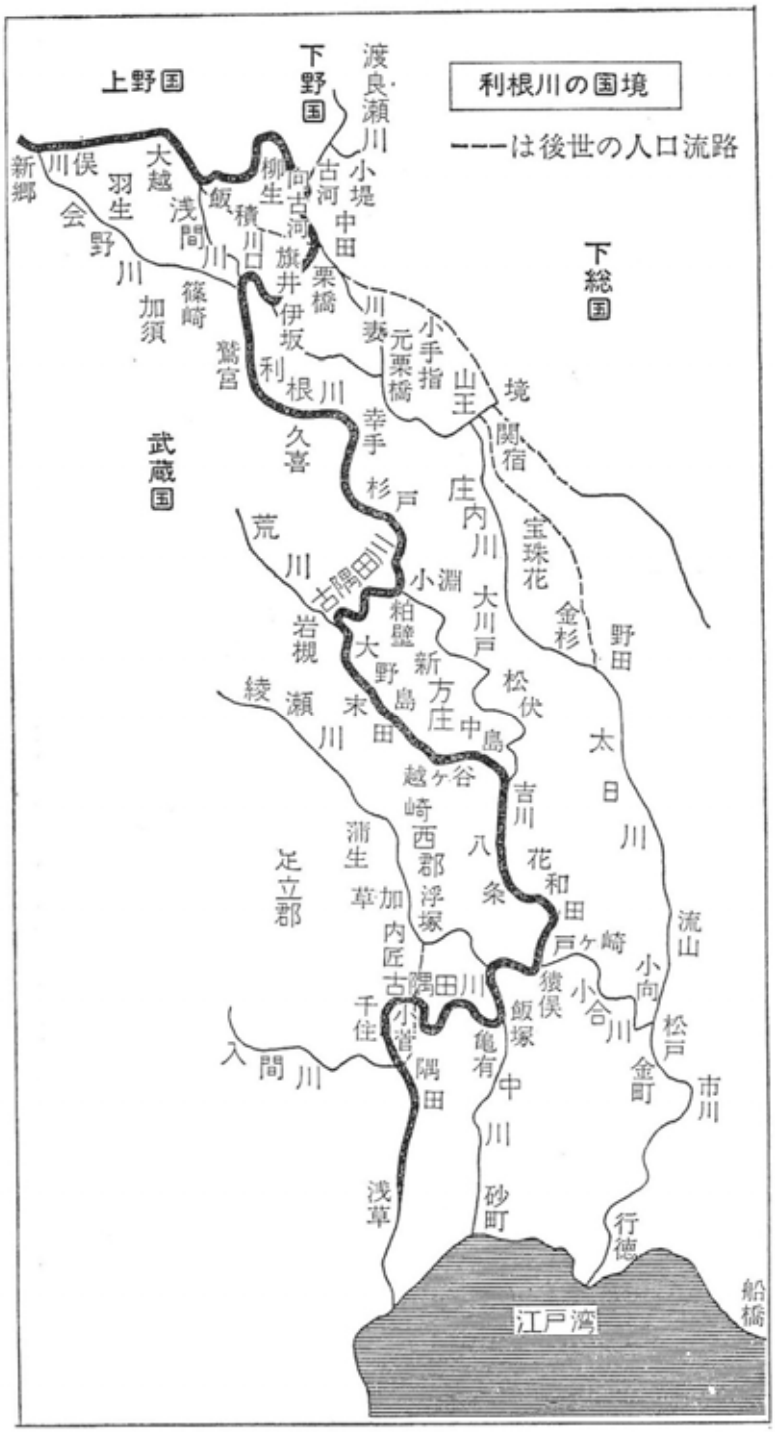
江戸旧聞「還らざる大河古隅田川」

http://www12.ocn.ne.jp/~kyubun/taiga.htm

2009/11/30

古代の隅田川（利根川）

下図は、本間清利氏の「利根川」（埼玉新聞社）より抜粋した。



かつての隅田川（利根川）は、古利根川（春日部市）から古隅田川（春日部市）、元荒川（越谷市）、中川、古隅田川（足立区）、隅田川と流れていたと推定されている。

５.「鐘ヶ淵」と越谷・増森「せい魚（ぎょ）伝説」

越谷市増森（ましもり）１７２６番地の小島専治氏（明治４３年生まれ、平成１２年６月死去）からの聞き取り調査（平成１２年３月）によると、今はなき古利根川に残る言い伝えや増森本田（ましもりほんでん）の繁栄の様子は次の通りである。

榎戸の山崎家（川藤４４０－１、屋号は「ふかんぼ」）の裏の古利根川の榎戸側には、地元では「ふかんぼ」と呼ばれた水深数メートル程の深みがあった。また「深んぼ」から上流百メートル程は「せいケ（が）淵（ふち）」と呼ばれ、せい魚（ぎょ）の伝説がみられる。この淵の主である「せい魚」と呼ばれる巨大な魚が住んでいたが、川が土砂の堆積で浅くなり住みにくくなったので、故郷を捨てて東京の隅田川にある鐘ヶ淵に移り住むようになった。ところが、このせい魚が鐘ヶ淵を通る船を転覆させ沈めるようになった。そこで鐘ヶ淵を通る船は必ず『増森船（ましもりぶね）だよ』と言うことにした。すると「せい魚」は自分の故郷からきた船と思い込み、転覆させることはなく、無事に通過することができたという。鐘ヶ淵はかつては難所として知られていたのである。

鐘ヶ淵は綾瀬川（綾瀬橋の下を流れる旧綾瀬川）が隅田川に流れ注ぐ地点にあり、現在の墨田区立鐘淵中学校付近にあった。増森は、明治・大正の頃、東京との交流が盛んであったからこのような伝説が生まれたのであろう。

この増森の「せい魚（ぎょ）伝説」は、昭和３５年発行の「越谷市の史蹟と伝説」（越谷市教育委員会）によると、「まだ増林村が合併にならず、各村にわかれていたころの話である」、つまり明治２２年（１８８９）以前の頃の言い伝えとしている。

増森は、大正から昭和の初めにかけては最盛期を迎えていた。松伏の醤油が松伏から東京に運ばれる高瀬舟がここを通過した。増森本田では晒し業が盛んであった。馬車で東京の日本橋方面に運送され、後に『本田晒業』と書かれた一トン車のトラック二台程がこの周辺では初めて使用された。また商人の店も所々に見られていた。こうして一時は「増森東京」とまで呼ばれるようになったのである。

なお増森から鐘ヶ淵までの航路は、増森の古利根川、中川、古綾瀬川（現、荒川放水路に平行して流れている綾瀬川）、新綾瀬川（現、旧綾瀬川）、隅田川の鐘ヶ淵と推定できる。

鐘ヶ淵よりさらに下流の隅田川に合流するには、増森の古利根川、中川、中川七曲がり（旧中川）、北十間川、隅田川となる。

これよりさらに下流の隅田川に行くには、増森の古利根川、中川、中川七曲がり（旧中川）、小名木川、隅田川となる。

また、昭和６年（１９３１）以降は、足立区に流れる綾瀬川の内匠橋（たくみばし）下流に中川と綾瀬川とを結ぶ運河ができたので、増森の古利根川、中川、花畑運河、綾瀬川、旧綾瀬川、隅田川の鐘ヶ淵と隅田川に出るまでの距離がかなり短縮されるようになった。

６．墨堤通り

江戸時代の墨堤（隅田堤）は、直線化されて道幅が広がった、ほぼ現在の墨堤通りにあたる。かつての墨堤の名残が、白鬚神社の南側の現在の墨堤通りの東側に平行して残っている。

この隅田川（荒川）沿いの墨堤は、熊谷堤につながり熊谷まで続いていた。つまり足立区内の常磐線の踏切、千住署、千住青葉中学校を通る道が墨堤から続くかつての熊谷堤で、それが熊谷まで続いていたのである。

なお、足立区内の熊谷堤の南方に見られる墨堤通りは、墨堤ではなく、熊谷堤の更に内側（荒川河川敷側）にできた掃部（かもん）堤である。

７．鐘紡発祥の地

現在の「カネボウ物流本社」（現、東急ロジスティック）と「カネボウ物流公園」のあたりにあった。説明板によると次のとおりである。

鐘淵紡績発祥の地　　所在　墨田区墨田 5 丁目 19 番ほか

明治 19 年(1886)に綿問屋の三越，大丸，白木屋，荒尾，奥田の 5 軒が集り，三越得右衛門を頭取として 東京綿商店が設立されました。翌年，資本金を 10 倍に増加させ，隅田川河畔鐘ヶ淵の広大な土地に紡績工場を建設して，明治 22 年(1889)に操業を開始，名称も有限責任鐘淵紡績会社と変更しました。これが，現在のカネボウ株式会社です。

鐘淵紡績は，設立当初こそ経営難に見舞われたものの，他社を吸収合併する中に，日清戦争を機に大発展を遂げ，世界有数の紡績会社となりました。

平成 13 年 3 月　　墨田区教育委員会

①多聞寺（たもんじ）

隅田川七福神の内の「毘沙門天」を祀る寺院。

８．隅田村の香取神社

このあたりは古隅田川と隅田川の東岸にあたり、元は下総国（しもうさのくに）葛飾郡葛西領（かさいりょう）[現在の葛飾区、江戸川区、江東区、墨田区]に属していて、江戸時代の初期、寛永年間に下総国から武蔵国に変ったと推定されている。

下総国に分布する香取神社は、千葉県佐原市香取にある下総国の一の宮の神社「香取神宮」を分祀したものである。これら香取神社は、香取神社の本社である香取神宮から当時

の古隅田川の東岸にかけて分布していたから隅田村にも香取神社が見られたのであろう。

参考までに、香取神社分布している葛飾郡二郷半領（にごうはんりょう）[現在の三郷市・吉川市]も同様に寛永年間に武蔵国になった。また、武蔵国埼玉郡新方領（にいがたりょう）[春日部市の古隅田川、越谷市の元荒川、春日部市から越谷市にかけての古利根川に囲まれた地域]の地域にも香取神社が見られ、かつては下総国葛飾郡下河辺荘（しもこうべのしょう）の一部であったと推定されている。江戸時代にはすでに武蔵国に属していた。

なお、香取神社は、越谷市周辺では、元荒川の以東、春日部市周辺では、古隅田川の以南に見られる。また、元荒川以西から綾瀬川にかけては久伊豆（ひさいず）神社が分布し、綾瀬川以西は武蔵国足立郡に属し、氷川（ひかわ）神社が分布している。古隅田川の以北は、武蔵国太田荘（おおたのしょう）に属し、鷲宮（わしのみや）神社が分布している。

９．古代の奥州道

古代の奥州道は、隅田宿（隅田千軒宿）、堀切、亀有、金町、松戸を通って奥州方面に通じる道であった。鎌倉時代になると「鎌倉街道・下（しも）の道」と呼ばれ、鎌倉と奥州を結んでいた。

現在、隅田川の土手道であった墨堤通りが主要な道路となって、かつての鎌倉街道は脇道となっているが、この通りに面して隅田村役場（現在の墨田２丁目１０－６、富士タクシーのあたり）があったという。

１０．円徳寺

ここに寛文１２年（１６７２）造立の高さが二メートル以上もする庚申塔（こうしんとう）がある。墨田区内で一番高い庚申塔であるという。釈迦如来像が見られ、台座には三猿（さんえん）が刻まれている。墨田区の登録文化財となっている。

なお、墨田区が平成六年三月に建てた案内版に阿弥陀如来像と誤記している。通仏相の施無畏・与願印を結ぶ釈迦如来像の誤り、阿弥陀なら阿弥陀とわかるように阿弥陀九品印を結ぶ。

１１．古代の東海道と隅田の渡し

古代の奥州道沿いに、現在は成林庵や正福寺があるが、その中間に墨田２丁目交差点がある。この交差点の東西の道が、かつての古代の東海道であるという。武蔵国府（現在の府中市）と下総国府（現在の市川市国府台[こうのだい]）とを結ぶ古代の官道であった。
この道を西方の隅田川方面（つまり武蔵国の国府方面）に進むと、隅田川にぶつかり、そこには古代の渡し場、隅田の渡しがあったと推定されている。

奥州道とこの東海道との合流したあたりに、古代の「隅田宿」（すみだじゅく）と呼ばれた宿駅があったと思われ、多くの家々が見られて栄えていたらしく、別の名を「隅田千軒宿」とも呼ばれていたという。

１２．榎本武揚銅像

大礼服（たいれいふく）にサーベルという姿の銅像である。晩年の榎本は、向島を愛した。住まいは、現在の言問小学校の北西にあった。

「榎本武揚（たけあき）は江戸幕府の旗本で、オランダに留学しました。帰国後、海軍奉行となりましたが大政奉還によって幕府は崩壊。官軍との戦いで、函館戦争を指揮しました。降伏後、武揚は特命全権公使としてロシアに派遣され、千島・樺太交換条約の調印に奔走したほか、文部・外務などの大臣に次々と任命され活躍しました。晩年は向島で悠々自適に暮らし、明治４１（１９０８）年７３歳で没しました。」（堀切駅東口荒川放水路そばの掲示板より）

１３．梅若公園

梅若丸伝説で有名な現在の木母寺は、もとはこの地にあった。

１４．東白鬚公園

「墨田区の北端、隅田川に沿うように南北に細長い東白鬚公園は、緑とレクリエーションの場です。公園の東側には、１３階建の高層住宅が並んでいます。公園と住宅、そしてリハビリ専門病院等をあわせ、この区域一帯は、江東デルタ地区の防災拠点。もし大地震や火災が起きた時には、公園は避難広場となります。」

「この公園は、江東再開発基本構想に基づき、災害時における避難広場の確保と生活環境の整備を目的としてつくられたものです。樹木には、火災による火の粉や熱風から人を守る働きが有ります。このため公園の樹木も防火力の大きい、常緑広葉樹を中心に枝葉の密なシイノキ、シラカシ、タブノキ、マテバシイ、ツバキ類などを用いました。この公園は避難した人々を火から守り、火災の延焼を防ぐようつくられたものです。また、ふだんは緑とレクリェーションの広場として広く利用されています。」

「墨田区の北端、隅田川に沿うような細長い形の東白鬚公園。付近は住宅や工場が多く点在する広範なゼロメートル地帯。一度、大地震が発生すれば、大災害となる危険性の高い地域に有る公園として、様々な防災上の工夫がこらされています。公園の東側に立ち並ぶ１３階建ての高層住宅には、防災シャッターや避難用ゲートなどが設置され、屋上には散水用放水銃もあり、非常時に備えています。園内には火の粉や熱風から身を守るための樹木を多く植え、南と北にひとつずつある池は、避難者の衣服や荷物についた火の粉を消

すための物。地盤も周辺より高くなるよう作られています。その他、非常用トイレも設けられています。公園中央にそびえるシンボルタワーは、江戸時代の火消人足組が高く掲げたまといをイメージしています。」（以上、公園内の案内版から抜粋）

１５．木母寺と梅若丸伝説

木母寺（もくぼじ）に梅若塚があり、隅田川の梅若丸伝説がみられる。また、春日部市の古隅田川そばの満蔵寺にも梅若塚があり、同様の伝説がみられる。

木母寺は、もとは「梅若寺」と呼ばれていたが、江戸時代に入って、現在の「木母寺」と名を改めたとされている。木母寺の「木母」とは、梅若丸の「梅」の字の分解、「木」と「毎」（母）からきているという。昭和５１年に現在地に遷座した木母寺の旧地は、門前の団地住宅第９号棟の東面、梅若公園内に存置、石標が立っている。

かつて、隅田川は利根川の下流に位置しており、武蔵国と下総国の境界線となっていたと考えられている。春日部市と足立区にある２つの古隅田川は、かつては利根川－隅田川の一部であり、現在の河川に則すれば、古利根川（春日部市）から古隅田川（春日部市）、元荒川（越谷市）、中川、古隅田川（足立区）、隅田川という流れが利根川及び荒川の本流であったと考えられている。（「かつて、隅田川は～考えられている。」までの文は、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の「古隅田川」から抜粋した。）

《梅若丸伝説》

梅若丸伝説の内容は、地域によって多少の違いはみられるが、ほぼ次のようである。
梅若丸は、平安時代に京都の吉田少将惟房（これふさ）の子として生まれた。七歳のときに比叡山月林寺に入ったが、十二歳のときに信夫籐太（しのぶのとうた）という人買いにだまされ、奥州の信夫（現在の福島県福島市南部の地域）に連れて行かれる途中、東国のこの地で病に倒れたので隅田川に投げ込まれてしまった。村人に助けられたが、梅若丸は、「尋ね来て　問わば答えよ　都鳥　隅田川原の　露と消えぬと」と辞世の歌を詠んで息絶えた。そこで、哀れに思った村人は、塚を築き、柳を植えた。その後、母である花御前がやって来て、我が子の死を知り、悲嘆にくれ、我が子の供養のために出家した。

１６．纏（まとい）のシンボルタワー

「纏（まとい）。それは江戸時代において火事といえば即、纏といわれ、纏のもとに総力を結集して、消火活動を行い、纏が火を消したとまでいわれていました。この公園は、大震火災時には、都民の安全を守る避難場所ともなっています。その安全をあらわすシンボルとして、ここに纏のモニュメントを建造しました。現在、社団法人江戸消防記念会のもとに１１区８９組があり、この纏は、第６区７番組のものをもとにしています。昭和６１年３月　東京都」（シンボルタワーに刻まれた解説文より）

１７．隅田川神社

隅田川の総鎮守であり、水上安全の守護神として崇敬を集め、古くは「水神」又は「水神宮」と称しておりましたが、明治５年に隅田川神社と改称しました。
現在の位置より北約２５ｍに南面して鎮座していましたが、高速道路が神域をかすめることとなって御社殿に大修繕を加え、昭和５０年６月現在の位置に遷座しました。創建年代は不詳ですが、水神が亀に乗ってこの地に上陸されたという伝承が残るそうです。（それゆえ、この神社では狛犬のかわりに亀となっている）当社は浮島の宮とも呼ばれていたようで、入間川と古隅田川の水流がぶつかりあう関係で中洲が生じていたのでしょう。中洲が東岸とつながってゆくのは利根川東遷によって古隅田川の水量が減り、ついには廃河となる 1700 年頃と思われます。

また、木母寺の北にある内川（今はない）がかっての古隅田川の名残りだったようで、新編武蔵風土記稿によれば、かっての内川の川幅は１００間（約１８０ｍ）あり、北国紀行にも入間川と劣らぬ様子であったことが書かれています。古隅田川と入間川（鐘ヶ淵より上流の荒川、鐘ヶ淵より下流は隅田川と呼ばれていた）は、ほぼ直角にぶつかっていて、たいへん複雑な水流になっていたと思われます。その川筋のせめぎ合いの間に洪水にならない中洲があってそこに水神社（浮島の宮）が作られたでしょう。

以上は、「http://www.asahi-net.or.jp/~vm3s-kwkm/zue/sumidagawa/index.html」より部分的にいくつか抜粋し、つなげたものである。（　）内は、加藤が付け加えた文。

水神の森跡

住所　墨田区堤通二丁目十七番　隅田川神社

荒川の下流、鐘ヶ淵を越え大きく曲がったこの地は、隅田川の落ち口（終点）で、かつて鬱蒼とした森が広がっていました。人々からは水神の森とも浮洲（うきす）の森とも呼ばれて親しまれていました。

昔、ここから入江が始まり、海となっていたことから「江の口」、すなわち「江戸」の語源ともなったといわれています。

水神の森は、「江戸名所図会」にも描写されているとおり、川岸にあった水神社（隅田川神社）の鎮守の森でした。川を下ってきた人々には隅田川の入口の森として、川をさかのぼる人々にとっては鐘ヶ淵の難所が近いことを知らせる森として、格好の目印となっていました。

その後、震災・戦災にも焼失を免れた森は戦後の開発で失われてしまい、隅田川神社自体も百メートルほど（北に）移されて現在地に鎮座しました。

平成十九年三月　　墨田区教育委員会

１８．近代映画スタジオ発祥の地

大正 2 年、日活はこの地に映画撮影所を開設しました。日活向島撮影所は、かつて東洋一の映画スタジオといわれ、近代日本映画の礎を築きました。総ガラス張りのグラスステージとよばれるスタジオは注目を集め、天気に左右されず撮影できるようになったことで、日本映画の質の向上に貢献しました。現在は、堤小学校の敷地内に碑が建てられています。（http://machimegu.jp/spots/35より抜粋）

近代映画スタジオ発祥の地

所在地　堤通二丁目十九番

この地は、かつて南葛飾郡隅田村といい、田園地帯で空気が澄み、映画撮影に最適の土地でした。ここにあった杉山茂丸氏の別荘地、７５００平方メートルを日本活動フィルム株式会社（「日活」の前身）が買収し、映画撮影所を建てました。それは大正二年十月のことです。

この撮影所は、日本で初めてという総ガラス張りの屋根をもったグラス・ステージで、広さ約４００平方メートルもあり、東洋一の規模と言われました。遠く吾妻橋の上からも、陽光にきらきらと輝く屋根を望むことができました。

このスタジオの完成によって、それまでのように映画撮影が天候に左右されることがなくなり、映画の内容も飛躍的に向上しました。ここでの作品は「向島作品」と称してもてはやされ、なかでも映画「カチューシャ」は永く名作の名を遺しました。

この撮影所は、関東大震災にも倒壊をまぬがれたものの、震災による映画界の受けた大打撃によって惜しくも大正十二年閉鎖されました。

昭和六十三年三月　　墨田区

②白鬚神社（しらひげじんじゃ）

隅田川七福神の内の寿老人を祀る神社。

１９．旧墨堤（かつての名残を残す隅田堤）

旧墨堤の道

所在地　墨田区東向島三丁目・堤通一丁目境

隅田川の自然堤防沿いに桜の木が植えられたのは寛文年間（１６６１～７３）。徳川将軍家の休息所であった隅田川御殿（現、堤通二丁目、都立東白鬚公園辺り）から白鬚神社の北側辺りまででした。江戸時代中期には八代将軍徳川吉宗が護岸強化と憩いの場づくりのために堤と並木の南端を言問橋の架かる辺り（現向島二丁目、言問通り）まで延ばして人々

に地固めをさせました。以来、堤は多くの江戸市民でにぎわう花見の名所、憩いの場所へとなっていきました。道幅は広く、道の両側には、見事な桜の並木が続いていました。

白鬚神社脇から地蔵堂へと続く湾曲した道は、今は姿を消してしまった、旧墨堤の名残りです。春は花見、正月は七福神めぐりの人々で特ににぎわいました。

関東大震災や東京大空襲などの復興事業を契機に墨堤通りは湾曲した道から直線道路へ、土の道から舗装道路へと整備されました。現在、旧墨堤の面影を見ることができるのは、この場所と、「墨堤植桜之碑」（向島五丁目四番先）近くの湾曲部の二カ所だけとなっています。

平成二十一年三月　　墨田区教育委員会

２０．子育て地蔵堂

子育地蔵堂

所在墨田区東向島三丁目二番一号

この小堂に祭られている子育地蔵は、文化年間（１８０４～１８１７）に隅田川の堤防修築工事の際、土中から発見されたと伝えられています。初は村の子供たちが、神輿がわりにこの地蔵をかついでいたそうです。

ところが、この地に古くから住む植木屋平作方の雇人夫婦が、ある日、田地で殺害されましたが、この地蔵が村の子どもの口をかりて犯人をお告げになり、たちまち犯人を捕まえることができました。この奇跡に驚いた平作は、当初に地蔵を安置して供養を怠りませんでした。

その後、将軍家斉が当地に鷹狩に来て、平作方に小憩の際、地蔵の由来を聞いて感銘し、帰城の時にお参りしました。平作は、これを記念して小堂を建てて地蔵を安置したところ、多くの人々が参詣するようになりました。

このお堂の前の坂は明治四十四年、堤防修築の時にできたものですが、今も「地蔵坂」の名で知られています。

昭和六十二年三月　　墨田区

③向島百花園（むこうじまひゃっかえん）

隅田川七福神の内の福禄寿を祀る庭園。

２１．幸田露伴の住居「蝸牛庵」跡

幸田露伴の向島（寺島村）に住むようになった時の最初の家は、明治２６年に兄の郡司大尉が千島探検に出発した時に住んだ家（「岐雲園」と称し、現在の住友ベークライト跡内）で、二番目が向島の蝸牛庵（現、雨宮酒店裏の駐車場、当時の建物は昭和４７年３月、愛知県犬山の明治村に移築して現存）、次女幸田文さんはここで生まれている。三番目が現在露伴児童遊園になっているところで、小石川に移る大正１３年まで住んでいた。

「蝸牛庵」とは、定住の家がなく身一つでどこにでも行くという意味で名付けたようである。露伴児童遊園には「蝸牛庵」や露伴の作品「蝸牛庵夜譚」の名にちなみ蝸牛のオブジェがあり、またパイプで組んだ五段のジャングルジムは、露伴の代表作とされる「五重塔」にちなんだものであるという。

以上は、「http://oshimamd.sakura.ne.jp/nagaoka/143.htm『旧寺島蝸牛庵』」等を参照した。

現地の解説の碑文によると、次のとおりである。

露伴児童遊園のこと

ここは文豪幸田露伴が明治４１年から大正１３年まで蝸牛庵と名付けて親しんだ住居の跡です。露伴は明治２６年冬、この寺島町かいわいに来住し、それから約３０年、最も力の溢れた時期をこの地にすごし、数々の名作を書かれました。当時の露伴は門弟を相手に剣道・弓道・相撲などして、よく庭で遊んだそうです。

（後略）

昭和３９年３月建立　　墨田区

２２．鳩の街（はとのまち）

「鳩の街」は現在の東京都墨田区向島と東向島の境界付近にあった赤線地帯（現在の鳩の街通り商店街）。地理的に「玉の井」と近く、1㎞ほどの距離である。太平洋戦争末期に、東京大空襲で玉の井を焼け出された業者が何軒か、この地で開業したのが始まりという。終戦直後は、米軍兵士の慰安施設として出発したが、兵士が性病に感染することが多いため、1946 年（昭和 21 年）に米兵の立ち入りが禁止された。その後、日本人相手の特殊飲食店街（赤線）として発展した。

1958 年（昭和 33 年）の売春防止法施行後、跡地は商店街やアパートなどの住宅となった。この街の店舗は、警察の指導でカフェー風に作られた。1952 年（昭和 27 年）現在で、娼家が 108 軒、接客する女性が 298 人いたという。

また、吉行淳之介の小説「原色の街」の舞台となった。さらに、永井荷風がこの地を舞台に戯曲「渡り鳥いつかへる」「春情鳩の街」を書いている。これらの荷風の 2 作品は、久保田万太郎の手により構成され「『春情鳩の街』より渡り鳥いつ帰る」として映画化され、

森繁久弥、田中絹代、高峰秀子、岡田茉莉子らが出演した。
　玉の井と同様に、この街も訪れる作家や芸能人が多く、吉行や荷風の他、安岡章太郎、三浦朱門、近藤啓太郎、小沢昭一などが、出入りしたことが知られている。また、女優・歌手の木の実ナナがこの地で生まれ育ったことで有名である。
　現在でも、商店街の裏に入ると色タイルを貼った娼家風の建物が多少残っているが、老朽化による建て替えや改築により、それらも少なくなった。
　また、今も、商店街や道路の名称として「鳩の街」の名は残っている。商店街は、下町らしい活気のある街であったが、現在はシャッターを下ろした店が多い。
（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より抜粋）

２３．墨堤植桜之碑

　墨堤の桜は、四代将軍家綱の時に始まり（木母寺周辺）、八代将軍吉宗が木母寺より南方に本格的に植樹し始めた。吉宗は、飛鳥山（北区）や御殿山（港区）にも桜を植えている。江戸っ子にとっては、王子の飛鳥山よりも近く、上野山のように音曲禁止と言ったやかましい規則のない向島は花見の時期には江戸一番の賑わいを見せた。墨堤の桜を楽しむには、人出の多い陸地を避けて、水上から見るのが最高の風流であるが、独自に舟を仕立てて準備するために莫大な費用がかかり、大金持ちに限られていた。
　隅田公園（鷹匠などが住んでいた旧水戸邸跡）内にある「墨堤植桜之碑」によると、明治十六年に一千本余りの桜を補植している。その後、関東大震災では壊滅的な被害を受け、東京大空襲では奇跡的に被害を免れたものの、戦後の高速道路の建設にともなってすっかり伐採されてしまったが、その都度、桜並木の復興を遂げてきた。

隅田公園　散策解説版⑧　墨堤植桜之碑を桜勧進　住民が育てた墨堤の桜

　江戸時代、花見の名所として地位を確立していった墨堤も、当初の墨堤の桜は水神社（現在の隅田川神社）付近を中心に植えられていました。しかし１８００年代から、地元の村の有志らによって桜が植えられ、墨堤の桜が南へと延伸して行きました。
　墨堤の桜が長命寺、三囲神社と徐々に延びて、枕橋まで達したのは１８８０年ごろといわれています。この間は地元有志の植桜だけではなく、有志が発起人となった「桜勧進」と呼ばれる寄付が行われています。
　墨堤の桜が地元の人々に愛されていた桜であることがこの植桜之碑に刻まれています。

④長命寺（ちょうめいじ）

隅田川七福神の内の弁財天を祀る寺院。

⑤弘福寺（こうふくじ）

隅田川七福神の内の布袋尊を祀る寺院。

２４．見番通り

料亭からの依頼で芸者さんを手配したり、玉代を精算したり、お稽古場を設けたりしているのが見番所である。そこに面する道が見番通りで、このあたりが向島の料亭街となる。現在、長命寺と三囲神社の中間のこの道路に面した西側に「向嶋墨堤組合」（向島の見番所）の建物がある。

⑥三囲神社（みめぐりじんじゃ）

隅田川七福神の内の恵比寿と大国（だいこく）を祀る神社。

三圍神社　大國神（だいこくじん）・恵比寿神（えびすじん）

三圍神社の別殿には、古くから大國（だいこく）、恵比寿二神の神像が奉安されている。もとは三井の越後屋（今の三越）にまつられていたものである。江戸時代の終わり頃、町人層の好みが世間のさまざまな分野で表面に現れ、多くの人びとによって支持された時代の流れの中で、隅田川七福神が創始されたとき、当社の二神もその中に組み込まれたのであった。

大國神は慈悲円満と富貴の表徴、恵比寿神は豊漁をもたらす神、商家の繁栄を授ける神として、庶民の信仰を集め、その似かよった御神徳から一対の神として崇められることが多い。大國を同じ音の大黒（だいこく）とも書く。

２５．言問橋（こととといばし）

「言問」という名称は、在原業平の詠んだ「名にし負はば いざこと問はむ都鳥 わが思ふ人は ありやなしやと」という歌に因むが、実際にこの業平の故事があったとされている場所は、現在の白鬚橋付近にあった「橋場の渡し」でのことであり、言問橋近辺には地名としては存在していたわけではないため、多くの説がある。

有力な説としては、1871 年（明治4 年）の創業でこの地に現在もある言問団子の主人が団子を売り出すにあたって、隅田川にちなむ在原業平をもちだして「言問団子」と名づけ、人気の店となったことから、この近辺が俗に「言問ケ岡」と呼ばれるようになり、それにあわせて業平を祀

ったことに由来するというものがある。
（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より抜粋）

春日部にもある在原業平にちなんだ業平橋

隅田川のある墨田区には、「伊勢物語」で有名な在原業平にちなんで「業平橋」という橋があり、「吾妻橋」も伊勢物語に由来するが、古隅田川のある春日部にも在原業平にちなんで名付けられた「業平橋」がある。豊春小学校の東側に現存している。明治２１年に県道（春日部岩槻線）が開通した時に古隅田川に架けられたものである。
なお、都鳥（みやこどり）とはユリカモメのことである。

２６．勝海舟銅像

建立の記

勝海舟（通称・麟太郎、名は義邦、のち安房、安芳）は、文政六年（１８２３年）一月三十日、江戸本所亀沢町（両国四丁目）で、父小吉（左衛門太郎惟寅）の実家男谷邸に生まれ、明治三十二年（１８９９年）一月十九日（発表は二十一日）、赤坂の氷川邸で逝去されました。
勝海舟は幕末と明治の激動期に、世界の中の日本の進路を洞察し、卓越した見識と献身的行動で海国日本の基礎を築き、多くの人材を育成しました。西郷隆盛との会談によって江戸城の無血開城をとりきめた海舟は、江戸を戦禍から救い、今日の東京の発展と近代日本の平和的軌道を敷設した英雄であります。
この海舟像は、「勝海舟の銅像を建てる会」から墨田区に寄贈されたものであり、ここにその活動にご協力を賜った多くの方々に感謝するとともに、海舟の功績を顕彰して、人びとの夢と勇気、活力と実践の発信源となれば、幸甚と存じます。

海舟生誕百八十年
平成十五年（２００３年）七月二十一日（海の日）

墨田区長　山﨑　昇

※なお、勝海舟は、弘福寺に参禅にしばしば訪れたり、弘福寺の裏手にあった王子権現（牛島神社）で剣術の夜稽古もしていたという。

２７．隅田公園・リバーピア吾妻橋（あづまばし）

この地は、幕末から明治にかけて、林泉式庭園である浩養園（こうようえん）があり、当時の人々の憩いの場所となっていたが、明治三十三年に札幌麦酒東京工場（後の大日本麦酒吾妻橋［だいにっぽんビールあづまばし］工場）が建てられた。現在は、墨田区役所、アサヒビール本社、住宅都市整備公団ビル等が建っている。

向かって左から、

ライフタワー、アサヒビール吾妻橋ビル、墨田区役所

中央の建物は、

炎を載せたアサヒビール吾妻橋ホール

隅田川七福神めぐり

はじめに

「隅田川七福神巡り」は「向島七福神巡り」とも呼ばれ、江戸時代の文化文政の頃、田園風景が広がり、富裕な商人の別宅も点在し、文人墨客にとって四季折々の風物が美しい行楽地であるこの向島の地に、文人墨客が江戸で一番古い谷中七福神をまねて生み出したものであった。それゆえ江戸で二番目に古い七福神といえる。その後、江戸っ子の人気となって盛んに七福神巡りが行われるようになり、谷中七福神をしのぎ、各地に数多くある七福神巡りの中では、江戸随一の七福神巡りでした。

「向島」とは、「浅草から見て隅田川の向こうに広がる島」という意味である。隅田川の東岸、墨田区の北西部を指している。古くは牛島と呼ばれていた。

なお、墨田区の地域は、戦前は、隅田川と旧中川を結ぶ北十間川（きたじっけんがわ）を境に北側が向島区、南側が本所区であった。戦後、合併して今日の墨田区ができたのである。

明朝体で書かれている以下の文章は、よくまとめ上げられている「一般社団法人・墨田区観光協会」の下記のホームページより抜粋した。

「http://www.kanko-sumida.com/1_7_1_sitifukujin.html」（取得日：2009・１１・２５）

それ以外の**太字の教科書体**で書かれている文章は、筆者が付け加えたものである。

①多聞寺（たもんじ）

墨田区墨田 5-31-13　Tel 03-3616-6002

【歴史と由来】

多聞寺は天徳年間（957～960）に創建され、不動明王像を御本尊としていた。当時は隅田千軒宿（隅田宿）と呼ばれた古代の奥州街道**（堀切、亀有、金町、松戸、柏）**の宿駅（現在の隅田川神社辺り）にあり、大鏡山明王院隅田寺と号していたと伝えられる。

古くよりこの寺は、隅田川神社、別称水神社の別当寺も兼ねていた。天正年間（1573～1592）に現在の地に移り、夢告により弘法大師作といわれる毘沙門天像を勧請し祀り、隅田山吉祥院多聞寺と改称したとされる。

なお、「隅田川七福神コース案内版・多聞寺毘沙門天」によると墨田堤の外側、水神の森（隅田川神社）の近くにあったが、徳川氏が江戸に移った直後、今の場所に移されたという。

享和三年（1803）の火災により山門を残し諸堂宇を焼失したが、後に再建された。御本尊、不動尊、地蔵尊は難を逃れ、御堂に現在も安置されている。

また、境内にある「映画人の墓」は、参拝者の多くが立ち寄る所として知られている。

【毘沙門天】

御本尊「毘沙門天」は木造立像で、世界の中心に立つ須弥山（しゅみせん）の四方門を守護する四天王（持国天、増長天、広目天、毘沙門天）の随一で、多聞天とも呼ばれ、北方の守護にあたり、仏法に帰依する人々を守護する。インド出身の神様。勇壮の神として古来より武人からの信仰が厚く、上杉謙信は、「毘」の字を旗印にしていたことも有名である。
多聞寺の「隅田川七福神碑」は、幕府の海軍奉行だった榎本武揚の書である。諧謔と風流を愛し、生っ粋の江戸っ子であった武揚は晩年向島に隠居し、墨提の散策を殊の外好んだという。
なお、七福神めぐりは通常、南から始めることが多いので、毘沙門天を祀ってある多聞寺は、最後の順番となっています。

【山門】

諸堂宇が中興再建された慶安２年（１６４９）に建立されたが、享保２年（１７１８）に燃失してしまった。現在の茅葺き屋根の山門は１８世紀中葉に再建されたもので、享和三年（1803）の大火では奇跡的に難を逃れた。多聞寺の中で最も歴史のある建造物である。関東大震災や太平洋戦争の戦火も逃れ、時代を超えて今もなお悠々とした姿を見せている。**墨田区の指定文化財に指定されている。多聞寺によると、「《山門中央の『隅田山』と記された山号額の裏に「明和九年」（１７７２）と彫られおり、現存する墨田区内最古の建造物」「一部に朱と思われる痕跡があり、建立当初は朱塗り瓦葺きであったことが察せられます」（解説版より）という。**

【六地蔵】

庫裡の前には、「坐姿六態地蔵」と呼ばれる都内でも非常に珍しい形の尊像がある。この六地蔵尊は、仏教における地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道のどこにいても救いの手を差し伸べてくれる地蔵尊である。

【狸塚】

茅葺の山門をくぐって左側に「狸塚」と刻んだ碑がある。その由来は次のようなものである。
『昔、寺の回りは樹木や雑草がうっそうと生い茂る狐や狸の住処で、悪戯をして村人や参詣者を困らせていた。時の住職鏝海（ばんかい）和尚は、人々の難儀を救おうと、草木を伐採した折に老松の根元に洞穴を発見し、諸悪の根源だと睨み、伐り倒した。すると、その夜から天地鳴動の怪異が続き、和尚は一心に御本尊の毘沙門天に祈り続けた。ある晩、姿を現した妖怪が、「この土地から出て行け」と和尚を脅すと、毘沙門天に仕える童子が天

から舞い下り、宝棒を振って妖怪を打ち伏した。翌朝、庭に出てみると、夫婦の大狸が死んでいた。哀れに思った和尚は、松の木の根本に二匹を葬る塚を築いて、霊を慰めた。』
俗に狸寺と呼ばれるようになった今日では、その名に縁のある狸の像が笹の陰から愛嬌のある顔を覗かせている。また、人々を苦しめてきた古狸の霊はその前非を悔いて、これらの像とともに近隣の人々や参詣に訪れる人達の守護にあたっているという。

【空襲の残骸】

なお、多聞寺の境内には「東京大空襲で被災した浅草国際劇場の鉄骨」と「戦災の証言者（空襲で焼かれた木）」が展示されている。

②白鬚神社（しらひげじんじゃ）

墨田区東向島 3-5-2　Tel 03-3611-2750

【由来と歴史】

白鬚神社は、天暦五年（951）に慈恵大師**良源**（じえだいしりょうげん、**元三**［がんさん］**大師ともいう**）が関東に下った時に近江国滋賀郡打颪（滋賀県高島町）に鎮座する白鬚大明神の御分霊を勧請し、ここに祀ったのが起源とされる。
祭神は、猿田彦命で国土の神、道案内の守神とされ、また隅田川沿いの道祖神の役割も果たすとともに古くから寺島村の鎮守として厚く信仰されている。
明治四十三年の大洪水の際には、当時、神主だった今井直は氏子とともに井戸に堤防を築き清水を確保し、人々の飲み水として役立てたという。この井戸は、今も神楽殿の脇に佇んでいる。
平成二年、心ない暴徒の放火により江戸時代末期に建てられた社殿は全焼し、多くの名木も失われたが、平成四年に社殿が再建され、現在に至っている。

【白鬚大神】

中国出身の神様で、道教の思想から出ており、「寿星」を人格化した神様。一説には、福禄寿の別名とも言われている。
寿老人は手に杖を持ち、その杖には、人の寿命の長さを記した巻物が結びつけられている。鹿を連れているが、この鹿は深山神のお遣いで、三千年の長寿の象徴であるといわれる。人々の安全と健康を守る長寿の神様として信仰されている所以でもある。
隅田川七福神では、「寿老人」を「寿老神」と記している。これは、隅田川七福神の選出に際し、寿老人を祀ってあるところだけが見つからなかったので、百花園のある寺島の鎮守、白鬚大明神に白羽の矢が立ち、その御名前からして白い鬚の老人の神様だろうからと寿老

人に充てたことから来ている。石碑には、「白鬚大神」と刻まれている。

【狛犬と燈籠】

社殿前の狛犬は、吉原の有名料亭から奉納された物**（文化三年[一八〇三]の建立で、吉原の松葉や八百善の名がみられる）**。御祭神の猿田彦大神が、天孫降臨の時、道案内を務めたということから、江戸時代からはお客様を案内して下さる神様として崇められ、「千客万来」「商売繁盛」にも御利益のある神社とされている。石灯籠は旧寺島村出身の田中抱二と中山湖珉によって奉納された。

【「鷲津」毅堂の碑】

境内には多くの石碑があり、社殿のすぐ左手には加藤千蔭筆の白鬚神社縁起碑、参道脇にまとめられた碑には、墨多三絶の碑などがある。また、幕末の幕臣で、外国奉行だった岩瀬鴎所（おうしょ）の供養碑もある。日米通商条約等で活躍したが、将軍の跡継ぎ問題のため安政の大獄で退けられ、向島で晩年を過した。他に、永井荷風の母方の祖父で、明治の顕官といわれた鷲津毅堂の碑などもある。
社殿で授与される勾玉型をした災難除けの土鈴は、いかにもひなびた民芸品の香り高いもので、人気がある。また、江戸時代に近郊農業として生産された寺島ナスにちなむ「招福茄子」の根付けも頒布されている。

【ぼんでん祭】

毎年五月五日に行なわれて来た「ぼんでん祭り」は、昔、この一帯が農村であった頃の習慣を伝える江戸時代からの神事で、竹につけた色とりどりの御幣を舟に乗せて隅田川に漕ぎ出し、五穀豊穣と川の氾濫防止を祈願した。御幣は祈願後に氏子へお守りとして配られていた。現在は、五年に一度の「本ぼんでん」のみが行われる。
寺島村の農村時代の名残を今に伝えている。

③向島百花園（むこうじまひゃっかえん）

墨田区東向島 3-18-3　Tel 03-3611-8705

【由来と歴史】

隅田川七福神の発祥の地、百花園は文化元年（1804）に仙台の人、佐原鞠塢（さわらきくう）が開いた。鞠塢は日本橋で骨董屋として財を成したが、晩年、この地に隠退し、多賀屋敷跡を買い求め、かねてから親しくしていた文化人の太田南畝〈蜀山人〉、亀田鵬斉、谷文晁、大窪詩仏、加藤千蔭らから寄贈された梅樹三百六十株を植え、梅園とした。このために亀戸の梅屋敷に対して、新梅屋敷と呼ばれた。梅は百花にさきがけて咲くと、当代の

人気絵師、酒井抱一が百花園と命名したと伝える。その後も名花名草が集められ、自然のままの趣をもち風流の極致をゆく庭園は江戸市民の絶好の行楽地となった。**文人墨客が集まるところで、大名庭園とは異なる、江戸町人文化の庭園を築きあげたのである。**ちょうど江戸町人文化が最も栄えた文化・文政期（1804～30）にあたり、人々は花と親しみながら茶を喫し、隅田川焼き（楽焼きの一種）を楽しんだ。この評判を聞き、時の十一代将軍家斉もこの庭園を訪れている。
その後、洪水による被害などの変遷があって、昭和十三年に東京市に寄付されたが、太平洋戦争の際、大空襲のためすっかり損壊、昭和二十四年に東京都の手により、現在のように復興された。いま東京に残る名園といわれる公園は、ほとんどが大名邸の跡だが、百花園は向島の隅田川情緒を結実した町人文化の粋であるところに持色がある。昭和五十三年には、国の名勝史跡に指定された。
蜀山人の手で「花屋敷」と書かれた風流の門をくぐると、四季の植物をあしらった庭のあちこちに亀田鵬斉の「墨沱梅荘記」の碑文をはじめ、数多くの歌碑や句碑を見ることができる。今も、春の七草籠の頒布、夏八月の虫ききの会、秋の月見の会など、風流な催しが行われている。

【隅田川七福神の発祥の地】

風流人の佐原鞠塢（さわらきくう）は、隠居したこの屋敷地に福禄寿を所持していたので、それが縁となり、佐原の友人である文人墨客舘らが、谷中で行われていた七福神の影響を受けて、田園風景が広がり風流が楽しめるこの地に七福神巡り新設のために七福神を設定した。そういう意味で、ここ向島百花園は、佐原鞠塢の所持した福禄寿がきっかけとなって、隅田川七福神の発祥の地となったといえる。

なお、設定するにあたって七福神のうちの寿老人だけがこの地域にはなかった。そこで、寿老人を白鬚神社の「白鬚大明神」にやむを得ずあてた。こうして七福神が全部そろい、向島七福神が成り立ったのである。

【福禄寿】

長頭短身の老人の姿で知られる神様で、出身地は中国。福寿を司るとされる南極星の精と考えられていた。風俗記という古書には、次のような話が載っている。
『中国の宋の時代、都に背が低く、頭が長く、ひげを伸ばした老人がいて、占いをしていたそうだ。稼いだ金で酒を飲んでは、「我こそは寿を与える聖人なり」と言っているのが宮中でも噂になり、ついに皇帝がこの老人を召し出した。「今何歳か？」と帝が問うと、「私は南方から来た者で、酒に酔っていないと、うまく話せない」との返事。それではと酒を与えると、「私は黄河が澄むのを度々見たことがある」と話し出した。中国の大河、黄河は常に濁っており、一千年に一度だけ澄むと伝えられている。「これは大変な長寿の人だ」と帝が思った時、にわかにその老人は消えてしまったという。』

百花園に奉られている陶製の福禄寿像は、骨董商であった頃の初代　佐原鞠塢の遺愛の品と伝えられている。風俗記に短身、長頭の容姿とされているが、この像は身の丈 50㌢のうち 40㌢が頭という極端なお姿をしている。
なお、この庭園では、神仏の設置は禁止とされているため、佐原鞠塢の福禄寿は、七福神巡りのとき（元旦から七草まで）だけに置かれる以外は、白鬚神社に常に預けられている。

④長命寺（ちょうめいじ）

墨田区向島 5-4-4　Tel 03-3622-7771

【由来と歴史】

開山は明らかではないが、元和元年（1615）頃の創建とも伝えられている。天台宗で比叡山延暦寺の末寺で、当初は常泉寺と号していた。
寛永年間（1624～44）に、三代将軍家光が鷹狩の途中、不意の腹痛のためこの寺に休憩した際、境内の井戸水を汲み薬を服用したところ、たちどころに痛みが消え快癒した。喜んだ家光がその井戸に長命水の名を与えたところから、以後、寺号を長命寺と改めたという。今も残る長命水石文や洗心養神の石碑がそれを物語っている。この井戸は、その後の自然災害もあって枯れてしまっていたが、平成十八年十二月に水道水を引いて"復元"された。
江戸時代の本堂は安政二年の大地震により全焼し、その後、武家屋敷を移築して再建された明治時代の本堂も大正十二年の関東大震災により焼失したが、阿弥陀如来像は難を逃れ、現在の本堂に安置されている。
境内には、他にも様々な石碑が立ち並んでいる。江戸時代には雪見の名所であったところから、芭蕉の雪見の句碑や、十返舎一九の辞世の狂歌碑、太田蜀山人の狂歌碑等がある。また、江戸時代の有名な国学者、橘守部の墓、幕府の外国奉行・会計副総裁を務め、明治になってから「朝野新聞」の社長に迎えられ、時事風刺の文を書いた成島柳北の上半身を浮き彫りにした碑などもある。
門前の桜餅は有名で、現在『山本や』が二百数十年の味を伝えている。
長命寺の門番だった山本屋新六が、墨堤の桜の落ち葉を塩漬けにして、「墨堤の桜」の花見の頃に餅にくるんで売り出したのが始まりとされる。「長命寺の桜餅」として知られた。
明治の初めに、お花さんという背のすらりとした美人がいたことも桜餅の人気に拍車をかけた。このお花さんにオランダ公使が一目ぼれして、プロポーズしたが、色よい返事をしないお花さんに当時の明治政府の高官たちが恋の取り持ちをしたという。

【弁財天】

七福神のうち、紅一点の弁財天は、水辺に多く祭られている神様で、長命寺の弁財天は長

命水に因んだものと考えられており、琵琶湖竹生島の弁財天の分身である。**長命寺の弁財天は、琵琶という楽器ではなく、武器を持っているのが特色と言える。**
弁財天は、そもそもインドの神様で、もとは河（水）の神様だった。日本に伝来してから、弁舌や音楽を司る芸能の神として信仰された。琵琶を奏でている御姿で描かれることの多いのは、そのためである。
言葉の神ということから文字・学問・智恵の神となり、やがて智恵や学問は福財をもたらしてくれるということから、貧乏から人々を救い、財宝を与えてくれる神としての信仰ができた。それに伴って、元は「弁才天」と記されていたのが、いつの間にか「才」が「財」の字に置き換えられて、福の神の仲間入りをした。水の神様ということから、へびがお遣いとして選ばれ、巳の日に参拝するという風習が生まれた。

⑤弘福寺（こうふくじ）

墨田区向島 5-3-2　Tel 03-3622-4889

【由来と歴史】

黄檗宗大本山、黄檗山万福寺（京都府宇治市）の末寺にあたり、祥雲作といわれる釈迦如来像をご本尊とする。
以前は、隅田善左エ門村の高森山にあった小庵だったが、延宝二年（1673）に鉄牛禅師により現在の地に移されるとともに、牛頭山弘福寺と改称された。山号を牛頭としたのは、当時、隣接していた牛嶋神社の祭神、須佐之男命の別称が牛頭天王（ごずてんのう）で古くから地主神として祀られていたことに由来する。
同じ禅宗の中でも最も中国に近い宗派として名高い弘福寺は、本堂の重層な屋根、大棟の宝珠や山門などの随所に特有の唐風建築様式がみられ、威厳に満ちた構えをしている。
境内には池田冠山の墓があり、少年期を向島で過ごした森鴎外の墓も関東大震災まであった。冠山は江戸末期鳥取西館藩主で、学識に豊み、退主後は、著述を楽しみ、晩年は冠山動人と号し、佐伯候毛利高標、任正寺候小橋長昭と並び文学三候と称され、天保四年（1833）に没した。**山門は、黄檗宗の本山、宇治万福寺の山門と同じ明国風をしている。**

【布袋尊】

七福神の中で唯一実在した中国唐時代の禅僧で名を契此、号を長汀子といった。弘福寺が布袋尊を祀ってあるのは、黄檗宗が禅宗の中でも最も中国に近い宗派であることによるものと考えられている。小躯、大腹で杖に布袋を荷って物を貰えば袋に貯え、困る人にはそれを施し、その中身は尽きることがなかったといわれる。無邪気で欲がなく、おおらかな性格とあわせて子供達から人気があり、幸せを願う世の人の共感を誘い、七福神の仲間入りをしたものと思われる。この世の幸福とは、金銭欲や物欲を満足させることだけではな

い、ということを教えてくれる神様といえる。

【咳の爺婆尊（じじばばそん）】

山門を入って右側の小堂に佇む爺と婆の像。当山開基稲葉家奉納。この像は、寛文年間、風外和尚が求道の旅の折、真鶴の岩洞穴で父母を慕うあまり刻み出したと伝えられる。作者風外の「風の外」の文字から風邪にも強かろうと爺像には、喉頭の病（**口の中の病**）に、婆像は咳止めに御利益があるとして信仰されている。

【羅漢彫根付】

「桃の種」で羅漢様を彫り上げてある。桃は古来より魔よけに効き目ありとされる。

【招福根付】

「寿」と「卍」をあしらった中国産の陶器製の玉で、念珠の時に使われる。

【絵馬】

日本画家　尾瀬戸春光氏による干支招福絵馬。

⑥三囲神社（みめぐりじんじゃ）

墨田区向島 2-5-17　Tel 03-3622-２672

【由来と歴史】

三井家の江戸の氏神として知られているが、昔、三囲神社は、三囲稲荷と呼ばれる墨東の古社だった。文和年間（1352～1356)、近江国三井寺の僧源慶が霊夢により東国を巡礼していた途中、ここ牛嶋の地に荒れ果てた小祠を見つけた。
村人に尋ねると弘法大師が創建した由緒ある祠であるとのこと。その様を深く悲しんだ源慶は自ら社殿の修復に取りかかると、埋もれていた壺が一つ出て来た。その壺に収められていたのは白狐に跨った神像だった。その時、何処からともなく現れた白狐が神像の周りを三度回ってまた何処かへか消えていったという。この故事から「みめぐり」の名が付いたと伝えられている。
三囲神社が現在の墨堤下に移ったのは、慶長年間（1596～1615）に発生した隅田川の大洪水後に将軍家康が東岸の嵩上げ工事を命じて以降のことと伝わっている。
境内には数多くの石碑が立っているが、その中でも最も有名なのは、俳人室井其角の雨乞いの句碑だろう。「此御神に雨乞する人にかわりて　"遊ふ田地（夕立）や田を見めぐりの神ならば"　晋其角」と刻まれている。
元禄六年（1693）は春から非常な旱ばつで、六月二十八日、其角は門人の蔵前の礼差白雲

とともに参詣に立ち寄ると境内では、鉦や太鼓を鳴らしての連日連夜続く雨乞い祈祷の最中であった。そこで其角は、能因法師の故事に倣い「ゆたか」の三字を俳句に「夕立や田を見めぐりの神ならば」と詠み短冊に記して奉納したところ、翌日から雨が続き、農民の苦難は救われたと伝えられている。
宮大工・清水嘉助奉納の精巧な内社殿は見物である。

【恵比寿神・大国神】

恵比寿神は鯛を抱え、釣竿を持っている姿から豊漁の神として、大国神は頭巾をかぶり、米俵に乗り、小槌を持った姿から台所を司る神として信仰されてきた。
大国神は神話に登場する大国主命（おおくにぬしのみこと）と考えられますが、大黒天ともいわれます。大黒天は元々仏法の守護神として崇められていたインドの神ですが、仏教が中国を経て日本に伝わる過程で台所を司る神としての性格が加えられたようです。そして大国と大黒との読み方が同じであることや御神徳が似ているところから、慈悲深く富貴を授ける神として混合され、信仰されるようになったといわれている。
室町時代頃から商業が盛んになってくると、ともに市場の神となり、さらには商売繁昌の神としても信仰を集めるようになった。俗に恵比寿・**大黒**というように、一対の神として商家などに祭られ、それにまつわる信仰習俗も盛んである。三囲神社の南の鳥居より入って左手の社に鎮座する恵比寿・大国の二神は、もと越後屋（現在の三越）に祀られていた御本尊と伝えられている。**越後屋の三井家が神社名の三囲にあやかったもの。**

【囲碁の奇才、中山善吉の碑】

八歳で囲碁を覚え、天才の名をほしいままにした中山善吉の碑。十四歳の若さで亡くなった後、その才能を称え、特別昇段を与えられた。明治二十七年の建碑。

【老翁（おきな）老嫗（おみな）の石像】

元禄の頃、三囲神社の境内には老夫婦が住んでおり、参詣者の頼みにより老婆が田圃に向かって狐を呼ぶと、どこからともなく狐が現れ願い事を叶えてくれたという。
其角もこのことを「早稲酒や狐呼び出す姥がもと」と詠んでおり老婆の没後、信仰者がその徳を慕い石像を建てたと伝えられる。

以上の「隅田川七福神」の記述は、「一般社団法人・墨田区観光協会」が作成したホームページから抜粋し、筆者が**太字の教科書体**で一部付け加えたものである。この場を借りて感謝の意を表します。　　平成 21 年 12 月 25 日　　越谷市郷土研究会　加藤幸一

ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会とは

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和４０年(１９６５)３月に発足し、平成１６年にＮＰＯ法人になりました。
現在は会員数が３５０名を超える程の大所帯です。
ほぼ毎月行われる史跡めぐりは３９８回を数えるまでになりました。

◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。

平成２０年９月２４日(水)～２８日(日) 越谷市立図書館「越谷の歴史あれこれ展」
９月２７日（土）「素敵旅！『織都』桐生」
１０月２日(木)～１３日(月)「越谷歴史展」（レイクタウン・イオンホール）
１０月１９日（日）越谷市民まつり「なつかし・五十年前！くらしと遊び」
１０月２２日（水）大宮の「鉄道博物館」と「県立歴史と民俗の博物館」
１１月１４日(金) 大間野の保存民家、旧中村家での恒例の開館記念イベント
１１月１８日(火) バス史跡巡り「総持寺の精進料理と中華街」
１２月１２日(金) バス史跡巡り「つむぎと蔵と歴史のまち、結城」
平成２１年１月　３日（土）「江戸最古を誇る谷中七福神めぐり」
１月２５日（日）講演会「旧・越谷宿の良さを発見しよう」
３月　１日（日）「案外知らなかった越谷を歩く・越谷から北越谷へ」
３月２１日（土）大間野の保存民家・中村家イベント「お手玉作り」
３月２５日（水）バス史跡巡り「里見八犬伝のふるさと内房」
４月１５日（土）「花と緑の安行、越谷へつながる伊奈氏の赤山陣屋」
５月２０日（水）バス史跡巡り「新緑の榛名山の麓、榛名神社・伊香保・水沢」
６月２８日（日）講演会「日光社参と身分制」
７月２４日（金）「大沢のうどんやの鰻と北川崎の虫追い」
７月２６日（日）講演会「県内の近現代の建物からまちづくりを考える」
８月２２日（土）大間野の保存民家・中村家イベント「ロケット作り」
８月２７日（木）「リニューアルした東武博物館と足立区立郷土博物館」
９月１１日（金）バス史跡巡り「横浜の開港１５０年目のお祝い」
１０月３日（土）バス史跡巡り「甲府の三ノ宮卯之助の力石・県立博物館」
１１月１１日(水)バス史跡巡り「つくばみらい・牛久・土浦」
１２月５日（土）イスラム教モスク「東京ジャーミー」と東大駒場キャンパス

◎会報『古志賀谷』の隔年の発行（Ｂ５版、１１０～１５０頁程度）及び無料配布（会員）

※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付・文化財パトロールの活動なども行っております。また、学校や自治会、各団体などへの出前授業も承っております。

郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間２０００円（４月～翌年３月、会報・諸案内状・諸会議費等）です。
どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。または当会の各種行事の際にお申し込み下さい。

〒343-0041　越谷市　千間台西　２－１７－１６　宮川 進 方
ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会
☎０４８－９７５－９１３９
事務所：旧日光街道沿いにある越谷産業会館の道路斜め反対側、
チャレンジショップ「夢空感(ゆめくうかん)」内にあります。
☎０４８－９６２－２６５１

◎インターネットの「越谷市郷土研究会」には、越谷に関しての歴史の資料が満載されています。是非ご覧ください。